

日本葬送文化学会資料（2012年7月定例会）

真宗大谷派僧侶 中下大樹

プロフィール：真宗大谷派祐光寺僧侶、超宗派寺院ネットワーク「寺ネット・サンガ」代表、生活困窮者の葬送を支援する「葬送支援ネットワーク」共同代表、いのちについての包括的支援「いのちのフォーラム」代表、一般社団法人「家族のこと」理事、一般社団法人「終活カウンセラー協会」全体監事、明治大学死生学研究所研究員

大学院でターミナルケアを学び、真宗大谷派住職資格取得後、新潟県長岡市にある長岡西病院ピハーク病棟（緩和ケア病棟）にて末期がん患者数百人の看取りに従事。在職中、中越地震で被災。退職後は都内に戻り、超宗派寺院ネットワーク「寺ネット・サンガ」を設立し、代表に就任。寺院や葬儀社、石材店、医療従事者、NPO関係者等とも連携し、「駆け込み寺」としての役割も担う等、「いのち」をキーワードにした様々な活動を行っている。

今までに、1万件以上の葬儀・お墓に関する相談を受け、連日、「死にたい」という自死念慮者からの相談を受けてきた。また、地元である新宿区百人町・大久保周辺の単身世帯30人の孤独死防止の活動（生活困窮者・自死念慮者を中心に月2～3回、1回1時間程度）を継続して行っている。過去に500人以上の末期ガン患者の看取り、2,000件以上の生活困窮者の葬送支援に僧侶として立ち会ってきた。

2010年3月には「自殺と貧困」をテーマにしたシンポジウムに、当時の総理大臣・厚生労働大臣・内閣府特命担当大臣等をお呼びするなど、政治的宗教的イデオロギーを超えた市民活動を積極的に行っている。

共著「自殺と貧困から見える日本（ピサイド出版）」、著書「悲しむ力（朝日新聞出版）」

いのちを考える上で、3つの視点

突発的な死Sudden Death（震災・交通事故・事件・自殺など）

緩やかな死Slow Death（老衰など）

準備された死Prepared Death（ホスピスなど、病院の中で迎える死）

東日本大震災の現場の話

亡くなった我が子を抱き、呆然とする若い女性

警察官の涙

瓦礫の中から見つかった人間の腕

ある消防団員の最期～死に様は生き様～

土葬に立ち会って（その時、石巻市役所では何が起こっていたのか？）

津波が引いた後、生き残った人々が真っ先に向かった場所(避難所・仮設住宅に住む3,000名)

避難所で起こっていたこと.....地域社会の力関係・人間関係がむき出しに

「葬儀をしたいけどできない」と「葬儀をできるけどしない」は大違い

非常時におけるお寺(教会)・葬儀社・石材店の立ち位置

看取りとは.....予後不良と診断された人とその家族の残された生命・生活・時間が、より豊かにより安全に安楽に、より積極的に過ごせるように配慮し、その人が望むその人らしい最期を迎えられるように援助することであり、同時に看取られる者、看取る者がともに死から学び、成熟すること(藤腹明子『看取りの心得と作法 17ヶ条』)

山口県光市事件で死刑判決・妻子の命を奪われた本村さんのことば
「どうすれば死刑という残虐で残酷な刑が下されない社会にできるか。それを考える契機にならなければ、私の妻と娘、そして被告人も犬死にです」

死から学ぶ・葬儀は誰のために・何のために？

500人の看取り、2,000人の葬送支援を通じて見えてきた課題と今後の展望

人間は遅かれ早かれ、必ず死を迎えます。昭和20年代は日本人の大多数が自宅で生まれ、自宅で死んでいました。それが高度経済成長の過程で(昭和50年代)自宅死から病院死へと逆転し、2011年現在、日本人の大多数の方が病院で生まれ病院で死んで逝きます。つまり、仏教でいう「生老病死」は生活の中・家庭の中にはもはやなく、非日常の世界・病院(施設)という隔離された世界の出来事となりました。その結果、「いのち」「生と死」という言葉にリアリティーがなく、看取りという言葉も、若い世代にとっては、意味がよく分からない言葉となりつつあります。

今後の日本は、少子化が進むと同時に、世界一の超高齢社会となります。家族・地域・会社といった縁が機能していれば、「おひとりさま」の看取りも可能かもしれません。現在、厚労省は在宅死(在宅ホスピス)を勧めていますが、社会的な受け皿が何も無いまま在宅死を勧めても、今のままだと「孤立死」が多発してしまうことが予想されます。それは特殊な人の特殊な問題ではなく、少子高齢化が進む日本社会全体の問題であり、「あなた自身」の問題なのです。

年間80件の自殺者の葬儀、50件の孤立死の方の葬儀を経験する者として.....

無縁社会とは何か？全くの縁の無い状態では、私たちはそもそも生まれてくることが出来ない。家族・地域・会社といった縁のあり方が変化している **絶縁社会**

家族・地域・会社に代わる第4の縁をどうやって作る？ 痛みや悲しみを縁とした「分かち合いの会」 安心して想いを語れる場の創出(自死遺族限定の分かち合いの会等)
後継者を必要としないお墓を縁とした「墓縁・墓友」 「おひとりさま」が定期的集える場
2010年・国勢調査の結果 約33%(3人に1人)が単身世帯、約30%が夫婦と子どものみ
「おひとりさま」社会をどう生きる？ 「イエ」制度の崩壊

NHK「無縁社会」の衝撃

番組出演後、全国の「おひとりさま」を中心とした相談 約1万件
サザエさんのような大家族は、もはやマイノリティ

2009年3月群馬県渋川市「たまゆら火災事件」

2011年11月「大久保火災事件」

高齢者の貧困・孤立・住まい(都営住宅)の問題

孤立した高齢者からよく聞かれる言葉

「早くお迎えが来てほしい」「ぼっくり逝きたい」「生きていても意味が無い」「誰からも必要とされていない」「自分が生きていてもいいと思えない」

根底にあるもの 自己肯定感を持ってないことからくる人間不信

「信じてもいいんですか？」という言葉が意味するもの

社会に蔓延する自己責任論 精神的・経済的余裕のなさ 「どうせ俺(私)なんて……」自己を卑下してしまう傾向

孤独と孤立の違い……孤立の方が深刻 貧困 貧乏 + 孤立

<私が聞いた福島の声>

福島の仮設・80代女性 「除染なんて、私達が若いころ(戦時中)、強制的に竹やりを持たされて鬼畜米兵と言わされていたのと同質的には同じ。小手先だけの対応で、何の意味もないことは皆、分かっている。でもそれを声に出すと、非難される。同調圧力だよ」

南相馬市 60代男性 「自宅一軒、竹中工務店に560万円で除染を依頼し、現場の下請けはピンハネされまくって、70万円で作業をする。末端の作業員は日当約8千円。除染が終了したら仕事なくなるから、皆、いい加減な仕事しかしない。それで雇用が確保され、経済が回る。それが除染ビジネスの実態」

南相馬市 50代女性 「私は最近、放射能より、人間の方が怖いと思う時がたくさんあります。ここ福島では、放射能の話をするだけで、圧力がかかる雰囲気の一部に蔓延しています。命がけで、放射能の問題を意図的に考えないようにしている人がいっぱいいる。一種の思考停止状態。それは自分を守るため？」

福島県 仮設・70代男性 「原発ですっと働いてきた。しかし、危険な仕事は下請けに回していた。山谷や釜ヶ崎のような寄せ場から労働者が連れてこられていることを、俺達は知っていながら、見て見ぬふりをしてきた。事故が起こった今、改めて考えると、俺も東電と一緒に、加害者なのかもしれない」

福島県 中通り 60代男性 「ラジオを聞いてひっくり返ったよ。放射能に負けない子供になろう！って福島県教育委員会がラジオで呼びかけているんだもの。中通りの住民は、被害者という意識が薄い。だから教育委員会は、県外に避難した人を非難するんだ。もうマスクをしている人も、ほとんどいないよ」

南相馬市・20代女性 「今まで原発の勉強とかしたことはない。でも、東電の下請け会社で働いている旦那が被曝して、入院してから、やっと目が覚めた。311以降<誰かが何とかしてくれるだろう・安全だ>と、放射能を浴びまくっても他人事のように考えていた。無関心は身を滅ぼすことにやっと気がついた」

いわき市 仮設・40代女性 「仮設で中高年の男性の自殺が起きた。明日は我が身……。でも、生きていけばいいことがあるなんて、口が裂けても子供達には言えない。明るい未来なんて、ここ福島では絶対にありえない。普通に生きて、当たり前で暮らせることが、こんなにも難しいことなんて思わなかった」

南相馬市・20代女性 「友達の女の子が中絶をしたという話を聞いたときに、私も子供はムリって思ってしまう。旦那や姑は子供が欲しいみたいだけど、もう福島では子供を育てられない。線量計で自宅周辺を図ると、ビックリするよ。子供を産んでも、どうせ外で遊ばせられないから、子供も可哀想だよ」

南相馬市・20代女性 「原発事故以来、国・政治・東電は最悪と、ずっと他者を批判してきた。でもよく考えてみると、私は選挙に一度も行った事はないし、新聞も読まないし、テレビはお笑いだけしか見ないし。原発近くに住んでいながら原発の事なんて全く知ろうとも思わなかった。今思うと恥ずかしい」

(大熊出身) 会津若松 仮設住宅・60代男性 「さあ考えてみて。仕事もカネも産業も何もなかった

だの田舎町が、原発を誘致することによって、莫大な恩恵が手に入るんだよ。目の前にニンジンをつぶら下げられて、それを断れる人がどれだけいると思う？ カネで動かない人間もいると思うけど、全体の中の一握りだよ」

福島県 仮設住宅・50代男性 「仙台に行った。全国から建築関係者が集まり、復興バブルのような状態になっている。儲かってしょうがないって飲み屋で言っている経営者のような人がいたけど、心ではそう思っているけど、言葉に出してほしくないね。だって、ここ東北では相当な数の人間が死んでいるんだよ。」

福島県 仮設・50代男性 「知人の男性が2名、ここ数カ月で自殺したよ。男は仕事や家族を失うと、本当に弱い。今まで名刺の肩書きだけで勝負してきたのに、311を機にゼロになってしまった。俺も今は無職。仮設の集会所でサロンとかをやっているけど、大の男が一人で参加できると思うか？」

福島県 仮設・20代女性 「子どもがいるので被ばくについて勉強したいと思い、県内の講演会等に行くようにしている。しかし偉い先生の講演会は、「放射線量はほとんどゼロ」「内部被ばくなどない」「福島は大丈夫」ばかり。正確な情報が、手に入らない。それを声に出すと、さらに非難される」

(大熊出身) 会津県 仮設・60代男性 「もう覚悟はできている。瓦礫の処分場は、原発周辺の地域にするしかないから。だって、もう人が住めないんだから。除染なんかする金があるんだったら、原発周辺の土地を買い上げて、そこに瓦礫処分場を作ったらいい。地元住民は、誰も大熊に帰れると思っていないもの」

南相馬市・50代男性 「東電や国のやり方は最低だ。人を人とも思っていない。でも、俺も今までずっと東電にぶら下がり、国に依存して生きてきた。一番悪いのは、俺の主体性のない生き方だ。思考停止に陥り、今さえ良ければいい、自分さえ儲かればそれでいいと、臭いものには蓋をせずと生きてきた」

福島県 仮設・70代男性 「若い世代にとっては、福島から逃げるのが一番の選択肢じゃないか？ 未来のある若者には、是非逃げてほしい。しかし、俺達のような年寄りには、今更逃げてほしくない。生まれ育った故郷で死ぬまで暮らしたい。でも、それは自分で決めたこと。どうなっても覚悟を決めているよ」

石巻市 仮設・60代男性 「ここ石巻でも自殺や孤独死は起きているよ。皆、それを隠したがるけど。でもそれらは、起こるべくして起きているのでは？ 絆や繋がりが大事と皆、口では言うけど、金の切れ目が縁の切れ目のような社会の中、他人の事なんかどうでもいいって言うのが多くの人の本音だと思うよ」

石巻の仮設・60代男性 「一年前の今頃、避難所にいた俺にテレビ局が取材に来た。全国の皆様、 と が全く不足しているから支援をお願いします！とカメラに向かって叫んだ。しかし、放送はされず、隣で家族を喪って泣き叫んでいる若い女性の姿が全国に流れた。初めからその絵が撮りたかったんだろ」

福島で今、起こっていることは、分裂・分断から、思考停止、そして対立である。

小さな子供を持つ親たちは放射能について心配する。しかし『(放射能を)心配し過ぎだ。もう勝手にしろ』『国や山下(俊一)先生が安全だと言っているから大丈夫だ』という声が存在する。一方で『怖いことは知らない方がいい』という声まで出てきて、福島を離れようとする人々に対しては『お前だけ助かるつもりか』とまで言われる始末。そして、いわき市長(いわき市は、富岡町をはじめ、福島全域から避難住民を受け入れている)からは、『被災者は朝から酒を飲んでいる』『パチンコばかりしている』というような発言も聞かれ、同じ福島県民同士で互いに批判を繰り返しているという現実がある。

そのような中、自分の思いを声に出せない人ほど「孤立」しがちになる。福島では、放射能について発言しようと思えば思うほど「同調圧力」がかかり、孤立し、生きづらさを抱えている人が多いというのが、私の感想である。

だが、冷静に今の社会を俯瞰的に見渡してみると、それは福島だけで起こっている特殊な地域の特殊な現象だろうか？わが国では今、政治や経済、メディア、学校教育から一般企業、宗教教団・葬送に携わる団体に至るまで、この国全体が割れているように私には思えてならない。福島で今起こっていることは、この国の縮図ではないかとさえ私には思えてくるのだ。福島の問題を通じて、私たちの社会のあり方そのものを見直す必要があると私は感じている。

中下大樹 nakashita@athena.ocn.ne.jp

ブログ <http://ameblo.jp/inochi-forum/>

ツイッター <https://twitter.com/#!/nakashitadaiki>